

飛鳥浄御原令と大宝令―官制を中心として―

直木孝次郎

はじめに

私が最初に刊行した著書は『日本古代国家の構造』（青木書店、一九五八年）で、大化改新およびそれ以前の時代を対象とするが、それにつづく著作は、『持統天皇』（吉川弘文館、一九六〇年）、『壬申の乱』（塙書房、一九六一年）で、七世紀後半の人物および事件を主題とした。またそのころ藤谷俊雄氏と共著で『伊勢神宮』（三一書房、一九六〇年）を出したが、その中で私がつとも力を入れて書いたのは、七世紀後半から八世紀初頭へかけての伊勢神宮の発展過程であった。

私はその後、いろいろの問題に手を出したが、右の研究歴にあらわれているように天武持統朝への関心が、私の歴史研究の出発点の一つであった。それゆえ、天武朝に編纂が始まり、持統朝に完成・施行された飛鳥浄御原令にも当然関心があつた。しかし古代史の研究といつても、文化や思想・宗教への興味から取り組みをはじめた私は、法制史的研究の知識が浅く、浄御原令研究の緒がなかなか掴めなかった。そこへ出現したのが青木和夫氏の「浄御原令と古代官僚制」（『古代学』

三卷二号、一九五四年）である。この論文が掲載された『古代学』という雑誌は、当時大阪市立大学の角田文衛氏を中心となり、望月信成・佐保田鶴治・白川静・梅田良忠らの諸氏を編集委員としており、私も大阪市立大に勤務していたので、編集を手伝っていた。

そのため私は青木氏のこの論文を公刊以前、なまの原稿で読むことができ、卓抜な構想とそれを支える緻密な論証に深い感銘を受けた。一見平板に見える日本書紀の記述のなかに、大きな史実がかくれていることも教えられるとともに浄御原令への関心がいつそう深まった。

青木論文と同じ年に発表された虎尾俊哉氏の「浄御原令の班田法と大宝二年戸籍」（『史学雑誌』六三編一〇号）も浄御原令研究史上注目すべき論文である。詳しくは後述するが、浄御原令の班田法が大宝令のそれとは甚だ異なっていることを論証したもので、『史学雑誌』六四編五号の「回顧と展望」は「本年度の古代史学界の最も輝かしい成果」と称揚した（井上光貞氏執筆）。

比較的若い年代でこれらの秀れた研究に接したため、自分でも浄御原令を研究したいと思ひながら、さきにもふれたように法制史研究が得手でなく、荏苒歳月を閲みし、浄御原令に関する考証的論考を発表

したのは、一九七八年の「大宝令前官制についての二、三の考察」(井上光貞博士退官記念会編『古代史論叢』中巻、吉川弘文館)が早いものである。その後もとくに研究を積んだわけではないが、長年関心を持ってきた問題であるので、大阪市立大学日本史研究会の創立に当り、講演を求められた時に、この「飛鳥浄御原令と大宝令」のテーマを選んだ。本稿はその報告の手控えをもとにし、若干添削を加えたものである。

論文を書きあげて顧りみると、報告の内容にはそれほど新発見があるわけではなく、公表に値するかどうかが疑いを持つが、私どもが研究をはじめたころは浄御原令と大宝令との差異を追及するのに熱意を持った研究者が多かったのに対し、近年の研究者はそれは自明のこととして、研究が停滞している面があるやに見受けられる。その点、私見を開陳して批判を乞うのもまんだら無駄とは思われない。具体例は後述にまわし、本論に入ることとする。

一 一九五四年の三つの論文

飛鳥浄御原令と大宝令の関係を考える時、だれしもが問題にするのは次に掲げる「続日本紀」(以下続紀と略す)大宝元年(七〇一)八月発卯(三日)条である。

発卯、三品刑部親王、正三位藤原朝臣不比等、従四位下下毛野朝臣古麻呂、従五位下伊吉連博徳、伊余部連馬養等をして律令を選

び定めしむること、是を以て始めて成る。大略、浄御原朝廷を以て准正となす。

刑部親王や藤原不比等に選定させた大宝律令が完成した、この大宝律令は浄御原朝廷の令(浄御原令)を基本とした、というのである。この「続紀」の記事に従うと、浄御原・大宝二令の間に大きな違いはないと考えられる。かつてはこう理解する説が多かった。律令学の大家瀧川政次郎氏は、その著『律令の研究』(刀江書院、一九三二年)で、右の続紀の文を引いて、

天武律令の内容は、大体大宝律令及びこれを刊修せる養老律令の其れと大差なかりしものと見てよからう。

とするのはその一例である。「天武律令」とあるのは「浄御原律令」のことである。かつては浄御原令とともに律も選定されたと考えられていたが、現在では浄御原律は未成立であったとする説が有力である。

一九三〇年前後、学界でもっとも権威ありとされていた黒板勝美著『国史の研究』も、

文武天皇大宝元年八月に至つていよいよ天下に頒布されたものが実に大宝律令である、大略天武天皇の御代に定められたものに准據したと続日本紀に述べてある。(各説上、一九三二年)とあり、「続紀」の記事を肯定的に紹介している。

『書紀』や『古事記』とちがい、記事のおおかたは信頼できる「続紀」の大宝元年八月条が律令研究に与えた影響は大きかった。実証を重んじ、穩健堅実な学風で知られる坂本太郎氏も、大宝元年八月条の

記事を引いて、

この記事は強弱いかようにも取れるのであるが、わたくしはとくにこうした説明（「准正と為す」を指す―直木）のあることを重視して、大宝律令はほぼ浄御原令を准拠として撰ばれたものであるとし、とりわけ令については大宝における篇目や条文は浄御原にも大部分は存在したものであることの二点を認めたいと思う。

と述べ、
このような傍証を考慮に入れて、わたくしは浄御原律令と大宝律令との密接な関係を信ずるのである（る）、

と締めくくる（『飛鳥浄御原律令考』『坂本太郎著作集』七巻（律令制度）吉川弘文館。一九八八年）。

いま坂本論文を読み直して興味深いのは、その初出が一九五四年（法制史研究）四であることである。それはさきに述べたように、青木氏が「浄御原令と古代官僚制」を、虎尾氏が「浄御原令の班田法と大宝二年戸籍」をそれぞれ発表した年でもある。三つの論文の発表された月まで記すと、青木論文は六月、坂本論文は七月、虎尾論文は一〇月である。各論文が刊行物の奥付の月日通りに刊行されたかどうかは疑問だが、坂本氏は虎尾論文はもちろん、青木論文も見ることなく、論文を準備・執筆したのである。一九五四年において坂本氏は五三歳、青木氏は二八歳、虎尾氏二九歳である。熟年の坂本氏が黒板・瀧川両氏以来の通説を祖述しているもどで、坂本門下の若い研究者は浄御原・大宝両令の相違を論じていたのである。

二 青木説と虎尾説

つぎに青木・虎尾両氏の研究を右の観点から取り上げる。まず青木論文だが、氏は浄御原・大宝両令の相違をきわだたせようとしたのではなく、天武朝の制と大宝令の相違を明らかにし、浄御原令制はそのギャップを埋めるもの、両者を繋ぐものと見、浄御原令と大宝令の連続性を重視していると読むこともできる。

氏は『書紀』の記事によつて、天武天皇没後の殯宮に誄を奏上している諸官を検討し、最初の日に誄した諸官には「天皇氏一族の家政機関的なほひ」があり、「大宝令官制の如き朕即国家的な行政機構へは、まだ一段の飛躍を必要とする」とし、「それではこの飛躍は浄御原令で行はれたか、大宝令で行はれたか」と設問する。そしてそれは、「やはり浄御原令の時」であると自答する。

その理由として、前述の誄奏上の記事から天武朝には八省の制はなく六官制であったのが、浄御原令で八官になり、大宝令の八省に続くことや、浄御原令施行の時期である持統四年七月に太政大臣・右大臣を任じたほか、八省百寮を皆遷任し、太宰・国司も遷任したと『書紀』に記すことを挙げる（八省百寮の百は概数、省も舞文の所産ではあるが）。

このように青木氏は浄御原令の編纂施行に大きな意義を認めているのであるが、一方同じ論文で、「浄御原令編纂及施行時代の官名とし

ては大宝養老の省・大宰系統と異なる官・総領系統一本立てであったと見てよいであらう」といい、浄御原令と大宝令の官司名には差のあることを認めている。浄御原令の編纂時期の大部分は天武朝であり、天武朝に行なわれていた官名は官・総領の系統である。官名からすれば浄御原令には天武朝の遺制が色濃く含まれていたとも思われる。また天武朝の六官制が浄御原令で八官制になったことも、青木氏は具体的に論証していないため、天武朝の制と浄御原令のつながりは強いという印象を受ける。

いま四五年前に読んだ時の感想を正確に思い出すことはできないが、いままで漠然と考えていたよりは浄御原令は大宝令と違うらしいと感じたと思う。少なくとも「大略以浄御原朝庭爲准正」だけで浄御原令をすますことはできない、と青木論文を読んで考えた人が多かったのではなからうか。

虎尾氏の論文の題名は前述のように「浄御原令の班田法と大宝二年戸籍」であるが、ここで大宝二年戸籍というのは正倉院文書の筑前国嶋郡・豊前国上三毛郡・同国仲津郡および郡名不明の豊後国の戸籍のこと^②で、総括して大宝二年西海道戸籍という。この戸籍には各戸毎に口分田の受田額が記してあるが、その受田額は例えば豊前国仲津郡千里の丁勝馬手の戸口一五人の受田額が二町一段一七一歩、同里の秦郡羊の戸口一人の受田額が一町六段一八八歩であって、大宝令の田令口分条の規定の男は二段、女はその三分の二、五年以下不給の規定によつて計算すると、田積が合致しない。第一、大宝令の規定によれば、

一七一歩や一八八歩などの端が出るはずがない。筑前国嶋郡の場合は豊前国のような端数は見られないが、受田面積が口分条の班給規定に合致しない点は同じである。しかもその受田額は大宝令制の班給額より多い場合もあり、少ない場合もある。豊後国の場合は受田額の方分るものが二例しかないが、やはり大宝令制とは合致しない。

このように大宝二年の西海道戸籍に記された受田額が大宝令の規定では解釈できないことは、従来から知られていたが、その受田額の算定の基準は不明とされていた。

虎尾氏はこの困難な問題に取り組み、戸毎に男女の戸口数と受田額の関係を詳細に比較検討して前人未発の多くの事実を明らかにした。その成果は多岐にわたるが、私なりに要約するとつぎの諸点である。

- (1) 豊前・筑前・豊後の三国はそれぞれ独自の基準面積で班給している。豊前は男一段二三五歩(五九五歩)・女一段三六歩(三九六歩)・筑前は男一段二四〇歩(六〇〇歩)・女一段六〇歩(四二〇歩)・豊後は男一段一一八歩(四七八歩)・女三二八歩である。その数値は豊前の場合、上三毛・仲津の両郡で共通である。
- (2) 男女の受田額は大宝令制と異なるが、受田額の比率は女はほぼ男の三分の二である。
- (3) 奴婢の受田額は、豊前は奴一九八歩・婢一三二歩、筑前は奴一八〇歩・婢一三〇歩である。豊後の戸籍には奴婢は見えない。
- (4) 奴に対する婢の受田額の比率は、両国とも正確に三分の二で、男奴に対する奴婢の受田額の比率は、豊前は正確に三分の一、筑前

はほぼ三分の一である。

(5) 受田資格は、年齢・課不課その他一切の制限がなく、一歳以上即ち戸籍に登録されている限り、良人も奴婢も受田者とされる。

虎尾氏の右の検討の結果から多くの問題が引き出されるが、もっとも重要な問題の一つは良賤ともに受田年齢に制限がない、という(5)の点であろう。周知のように養老令田令の口分条に「凡給口分田者、男二段、女減三分之一、五年以下不給」とあり、虎尾氏も引用しているように田令集解所引の官戸奴婢条所引の古記に、

問、家人奴婢六年以上、同良給不、答、与良人同、皆六年以上給之、

とあって、大宝・養老兩令制では受田については五年以下不給という原則があると考えられる。(5)はこれと異なるのである。

(1) (4)は受田額の基準面積は、大宝・養老兩令制の男は二段、女はその三分の二の一段二〇歩とは相違するが、西海道戸籍の男女の比率がほぼ三対二、良賤の比率がほぼ三対一であるのは、原則を定めた令条と、実施を前提とした具体的数字の差にすぎないと解釈することができる。だから比率の点では西海道戸籍が依拠した令が大宝令ではないとは言えないが、「五年以下不給」の原則と年齢制限のない制度の差は無視できない。これを根拠に、大宝二年の西海道戸籍は、「大宝令に先行する浄御原令に拠ったものと解さざるを得ない」とする虎尾氏の意見は説得力がある。すくなくともこの点で大宝令は浄御原令と異なると考えた研究者は少なかつたと思う。

その他、給田額にしても、虎尾氏は「男の給田額は恐らく(浄御原令も直木補)大宝令と同じく二段かと想像される」とするが、豊前一段二三五歩・筑前一段二四〇歩・豊後一段二一八歩で、いずれも二段より一二五歩・一二〇歩・一四二歩と少ないのであるから、浄御原令のそれは二段より少なかった可能性もある。

これを要するに、口分田の制において大宝令と浄御原令の間には似た点もあり、違った点もある。ここでも単純に「浄御原朝廷を以て正となす」とは言えないというのが、虎尾論文に接した研究者の多くが抱いた感想ではあるまいか。

但し浄御原令制と大宝令制の差の主眼点となる年齢制限の有無の問題は、現在では明石一紀氏の研究³などによって様相が変ってきた。つまり大宝令制でも「五年以下不給」ではなかつたとする説があらわれ、有力化しつつあると思われるのである。しかし明石説が現われるのは虎尾論文が出てから二六年後の一九八〇年で、一九五四年当時、大宝令に年齢制限のあったことを疑う研究者は一人もなかつたはずである。

情勢はこのようであつて、浄御原令と大宝令に差のあることは、かなり研究者のあいだに浸透していたと思われる。前記のように虎尾論文を激賞した井上光貞氏自身、地方制度において浄御原令制と大宝令制の間に差があるとする論文を、虎尾論文より二年早い一九五二年に発表しているのである。「郡司制度の成立年代」(『古代学』一巻二号)がそれである。

三 評と郡、国宰と国司

井上氏のこの有名な論文の内容は改めて解説するまでもないが、氏は郡の制度は大化二年に宣せられた改新詔にはじまるとする当時の通説に対してきびしい批判を加えた。すなわち神宮雜例集・皇太神宮儀式帳・常陸国風土記等に見える天智朝以前の古い記録、続日本紀に見える天智朝や持統朝の記録、丙戌年（朱鳥元年）の年紀を持つ写経奥書、己丑（持統三年）や戊戌（文武二年）の年紀を持つ金石文などには、大宝令制ならば郡や郡領・大少領などの文字のあるべき所にそれらの名辞は見えず、評・評督・評造・助督・助造などの文字を以て埋められていることを指摘し、

大化から文武天皇四年（次の年が大宝元年―直木補）までは評系統の記載法のみであり、それが郡系統に代ったのは大宝令においてであるという臆測に導かれるのである。少なくともこの臆測を否定すべき根拠を提供することは困難であろう。

と論ずる。臆測と言いながら、相当強い自信を以て、浄御原令までは評制、郡制となるのは大宝令からというのである。こういうところにも両令の差異があると推定される。

この新説に対し、坂本太郎氏は直ちに「大化改新詔の信憑性問題について」（『歴史地理』八三巻一号、一九五二年）を草して反論し、書紀の中でも実録的部分として信頼される天武・持統紀や書紀以外でも

古制を伝えていると思われる諸文献に「郡」系統の文字が使用されることを指摘した。井上氏はこれに応じて「再び大化改新詔の信憑性について」（『歴史地理』八三巻二号、一九五二年）を発表し、逐条論駁するとともに、自説をも再考して、「郡」系統文字の始用については大化改新詔説は認めないが、大宝令と浄御原令説の二説があり得るとした。自説を若干後退させたのである。

郡字使用時期についてのいわゆる郡評論争はその後も継続したが、井上・坂本論争から九年のちの一九六一年にはじまる藤原宮跡の発掘によって出土した木簡によって、大宝令始用が正しいことが判明して結着した。周知のように大宝令施行以前の年代に属する木簡はすべて紀年を干支であらわし、それらの木簡では郡にあたる部分には評系統の文字を用い、郡系統の文字を用いたものはすべて大宝令施行以後のものであるからである。地方制度の上で、浄御原令と大宝令の間に差があることが明らかになった。またその副産物として、日本書紀に見える二百を越える郡字の多くは書紀編者によって潤色された文字であるのみならず、続日本紀でも大宝元年までにみえる郡字（例えば文武二年三月条の「意字郡司」、文武四年二月条の「安房郡」の郡）も、原史料そのままではないことが明白となった。

以上に述べたことよりすると、郡司の語が用いられはじめるのは大宝令施行以後である。では「国司」はどうであろうか。国司の語は日本書紀の推古一二年条にみえる聖德太子肇作の十七条の憲法の第二一条に載せることなどから、従来は郡司ほどには疑問視されなかった。

一九七一年にいたり、藺田香融氏は「国衙と土豪との政治関係」(『古代の日本』第九巻、角川書店)を発表して、「国司」の称呼の成立は大宝令施行以後とした。氏によれば孝徳・天智・天武の諸朝やそれ以前の時期に、国司の前身の官職がミコトモチと呼ばれ、「宰」あるいは「使者」と表記されただけでなく、浄御原令制下でも「国宰」と記されたという。

浄御原令制下で国宰と記されたことの論拠としては、続日本紀の文武元年八月の宣命に「国々ノ宰」とあること、同じく大宝元年六月の勅に「国宰郡司」とあること、常陸国風土記と播磨国風土記にしばしば「国宰」の記載のあることなどが挙げられ、早川庄八氏も「律令制の形成」(岩波講座『日本歴史』2、一九七五年)で藺田説を支持した。

ただし藺田氏の挙げた論拠のうち、大宝元年六月の勅にみえる「国宰郡司」は、同じ表現が大宝・養老両令の施行期にも見える(例えば続紀の天平一〇年一〇月己丑条、延暦五年四月庚午条)ので確証とはできないが、住吉大社神代記にみえるつぎの一文も、論拠として追加することができる。

即乙丑年(天智四年に相当)直木十二月五日宰頭伎田臣麻、率助道守臣老夫御目代大伴波田連麻呂等、尋大神御跡、奉寄定。
(播麻国賀茂郡椅鹿山領地田畠)条。傍点直木)

傍点を付した「宰頭」は、はやく田中卓氏が指摘したように(『常道頭』(『田中卓著作集』5「壬申の乱とその前後」国書刊行会、一九

八五年)。初出は一九五四年)、国司の守の意であろう。

そのほか近年藤原官跡から出土した木簡に「粟道宰」(飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報一二)の記載があることも、藺田説の補強に役立つであろう。詳しくは拙稿「藤原官木簡にみえる「粟道宰」について」(拙著『飛鳥奈良時代の考察』高科書店、一九九六年、初出一九九三年)を見られたい。

四 「爲准正」の意味―林紀昭論文と東野治之論文

このように地方の行政制度は、大宝令の施行とともに浄御原令制の評は郡に、国宰は国司に変遷した。それが名称だけのことか実質を伴うものかは検討を要するが、何らかの実質の変化をともなう可能性は少なくない。詳しくは論じないが、国政の内容が変化したことは、続紀の大宝二年二月乙丑条に、

諸国司等、始めて鑑を給はりて罷る。是より先、別に税司の主鑑あり。是に至りて始めて国司に給ふ。

とあることで察せられる。第一節に記した「大略、浄御原朝廷を以て准正となす」の続日本紀の文章をどこまで信じてよいかは、ここでも疑われるのである。

辞典類をみても、吉川弘文館刊の『国司大辞典』八巻(一九八七年)の「大宝律令」の項には、大宝令と養老令の差は「令集解」によって比較すると、字句の修正が主であるが、大宝令と浄御原令の差違は、「大宝元年八月の完成当時「大略、浄御原朝廷を以て准正となす」と

いわれているものの、かなり多方面にわたっていたと見られる」とする（青木和夫氏筆）。東京創元社刊の『新編日本史辞典』（一九九〇年）の「大宝律令」の項では、

「続日本紀」は「大略浄御原朝廷を以て准正と爲す」と記すが、藤原宮跡出土木簡に見える「浄御原令」施行期の官名などからみて、両者のあいだにはかなりの相違があったようである。

という（鎌田元一氏筆）。

大和書房刊行の『日本古代史辞典』（一九九三年）の「大宝律令」の項は、統紀にみえる「大略、浄御原朝廷云々」の文を挙げ、「（大宝律令は）浄御原令を受けたものである」ことだけと記し、両者の差異については特記していない（菊池克美氏筆）が、現在では「浄御原朝廷を以て准正と爲す」の語をそのまま受け取ることができないことは、古代史研究者の間では常識となっているのではなからうか。

しかし顧みると、この見解に辿りつくまで私たちは相当に長い年月を要したようである。浄御原・大宝両令に差のあることは、前述した一九五二年の虎尾論文も一九五四年の青木論文も指摘しているが、「准正と爲す」の統紀記事の批判には及んでいないようである。その後も私の見落としがあるかと思うが、「准正を爲す」の批判をした論者はそれほど多くはなさそうである。管見の限り、林紀昭氏が一九七〇年に発表した論文「飛鳥浄御原律令に関する諸問題」（『史林』五三巻一号）は比較的早いものであろう。

この論文は標題に「諸問題」とあるように考察は多岐にわたるが、

以下には浄御原・大宝両令の関係の問題に限って紹介する。氏はまず「現在の段階では、准正の語を以て浄御原令は大宝令とほぼ同じ篇目及び条文であったとまで解することは危険で」とあるとする前提から出発し、浄御原令の条文を一条だけではあるが復原し、それを大宝令の条文と比較して両令の異同を考究するのである。その方針により林氏に取り上げた素材は、つぎの持統紀五年一〇月乙巳（八月）条の詔である。

詔曰、凡先皇陵戸者、置五戸以上、自余王等有功者、置三戸、若陵戸不足、以百姓充、免其徭役、三年一替、

この詔文を浄御原令条文と解する意見もあるが、延喜式諸陵寮条に類似の規定（凡山陵者、置陵戸五畑令守之、有功臣墓者、置墓戸三畑、其非陵墓戸、差点令守者、先取近陵墓戸充之）があることを理由にして、林氏はこれを令の施行細則である式的性格の規定と解する。ではこれに対応する浄御原令の条文はどのようなものであったか。林氏はその参考として、大宝喪葬令の第一条を、令義解や集解所引古記によつてつぎのように復原する。

凡先皇陵置陵戸令守、非陵戸令守者十年一替、其兆域内不得葬埋及耕牧樵採、

そしてこの令文では陵戸の設置を命じているが、陵戸の戸数を指定していないのに対し、持統五年詔は陵戸の戸数を具体的に指定している。「原則的規定たる令と施行細則としての式的機能をもつ詔との関係が窺え」る（林）のである。ただし大宝令では「非陵戸令守者十年

「替」と、令文中に非陵戸者の交替について規定するのに対し、持統五年詔でも交替の年数は異なるが、陵戸の不足を一般民戸で補充した場合の交替規定・免税規定が既に含まれている。それからすると、浄御原令の先皇の陵戸に関する条文（喪葬令第一条）は大宝令の同条と「内容が異なり、非陵戸者の交替規定は存在していなかった疑いが強くなる」と林氏は論ずる。妥当な推定である。

以下詳細は林氏の論文に拠っていただくことにして、簡略に論旨を追うと、唐令では「唐令拾遺」が、開元七年令の喪葬令の陵戸の規定をつぎのように復原している。

諸諸陵皆置留守 領甲士与陵令相知巡警 左右兆域内禁人無得葬埋 古墳則不毀

浄御原令が藍本とした永徽令もこれに類似した陵戸の設置を命じた原則の規定からなる一条が喪葬令にあり、陵戸の徵發等の細則規定は永徽式に存したと思われる。林氏はこれに加えて新羅における喪葬令の右の条文に該当する条文を検討した上で、次のように結論する。

浄御原令には大宝令と異なり、非陵戸者の交替規定が規定されていない疑いが強かったが、それは（中略）浄御原喪葬令本条が唐永徽令の内容を直訳的に継受した結果、大宝養老令とは異なり、陵戸の設置という唐令に類似した原則の規定に留まることになったからと考えられる。それ故、浄御原喪葬令実施のために、（中略）後の大宝令の内容の一部をも含む式的機能をもつ細則規定が、持統五年詔として発令される必要があったのである。

と述べ、

「修正」の扱いには今後従来より一層の慎重な態度が要求されよう。と結ぶ。引用が長くなったが、研究史上重要な研究と思われるので、古い論文ながらやや詳しく紹介した。筆者林氏はこのとき京都大学法学部大学院学生だった。

この論文が発表された一九七〇年の九年前の一九六一年より藤原宮の木簡の発掘がはじまり、また翌年の七一年に藤田氏の国幸に関する論文（前掲）が発表され、浄御原令と大宝令の差は次第に明らかになってきたが、「大略以浄御原朝廷爲修正」の意味をより詳しく追及し明らかにしたのは、林論文の発表から一六年後、一九八六年に発表された東野治之氏の論文「統日本紀」の「大略以浄御原朝廷爲修正」（『日本歴史』四五三）である。

問題の「統紀」の記事は、はやく中田薫氏が指摘した（『古法雑観』中田著『法制史論集』第四巻、岩波書店、一九六四年。論文の初出は一九五一年）ように、左の『唐会要』の記事と関係がある。

至（武德）七年三月二十九日成、詔頒天下、大略以開皇爲修正五十三條、凡律五百條、格入于新律、他無所改正、（卷三十九・定格令）

東野氏はそのほか、『冊府元龜』卷六二（刑法部、定律令第四）にも

又云、詔遣裴寂・殷開山・郎楚之・沈寂安・崔善爲之徒、定律令、數歲始成、大略以開皇爲准、正五十三條、權用班行、展矜之科、

有所未略

とあることを指摘し、「統紀の記事の原拠はこのあたりにともめられそうに思われる」という。それよりも問題は、『唐会要』『冊府元龜』の文の統紀のもととなったと思われる部分は、「大略開皇を以て准正と爲す」ではなくて、「大略開皇を以て准と爲す」と読め、その方が正しいと思われることである。東野氏はその推定を裏づけるものとして、前引『冊府元龜』の記事の直前に見えるつぎの文を挙げる（便宜上、東野氏の付した反点を付す）。

先是、高祖勅尚書左僕射裴寂（以下人名略）等、檢定律令、大略以開皇爲准、于時諸華始定、辺方尚梗、救時之弊、有所未暇、惟正五十三條、格入新律、余無所改、至是奏上、于是頒行天下、右の文に見える高祖は唐初代の皇帝、開皇は隋の初代文帝の年号だが、ここでは開皇律令を意味する。高祖は裴寂らに律令を檢定させ、

大略開皇律令を基準としたが、草創の時に当り辺境が治まっていなため、時の弊害を救済する余裕がなく、ただ五三條を改正して格とし、新しい律に入れ、他は改正せずに奏上した、というのである。東野氏はこの解釈にもとづいて、つぎのように言う。

先の問題の箇所を「准と爲す」と読んで「正」以下と切り離すべきことは、多言を要しないと思われる。

つまり前引の『唐会要』もそのつぎに挙げた『冊府元龜』の文も、問題となる處は「大略、開皇を以て准と爲し、五三條を正す」と読むべきで、准と正とをあわせて「准正と爲す」と読むのは正しくない、

「准正と爲す」としか読めない『統紀』の文は、『唐会要』や『冊府元龜』にみえるような文章の意味を理解した上で、創意を以て「准正」という語を用いたのではなく、「原書の文の誤読に起因する」と東野氏は判断する。従うべき意見である。

しかしそれにしても、統紀編者が「准正」という語を用いたのは、大宝律令が淨御原令を受けついでいるという考えがあつたからで、両者（とくに大宝令と淨御原令）は關係が深いことは認めてよいとする論も成り立たないとはいえない。だがこれも東野氏が言うように、統紀編者はそう考えて「准正」の語を記したのではなく、『唐会要』などの書き方が「律令編纂に関する一般的な書き方と受け取って」書いてだけであろう。「淨御原令と大宝令の異同を論ずる場合、統紀のこの段は考慮の外に置く」（東野氏）のがよいと考える。

五 官司の呼称と四等官の名称

このように律令の研究が深まってくると、淨御原令と大宝令の關係は、連続の面ももちろんあるが、違いの少なくないことが注意された。官制については、その中心となる太政官の構造の相違点が多く、研究者に取りあげられた。例えば、天武朝の六官が淨御原令では中務省の前身の中官と宮内省の前身の宮内官が加わって八官となり、大宝令の八省制の形が成立したとする説に対し、中官・宮内官はまだ纏っておらず、後の中務省・宮内省に含まれる諸機関が内廷に直屬する形で存

在したとする説があり、また天武朝に存在した大弁官は淨御原令制では左弁官・右弁官に分れ、大宝令制の八省に相当する八官が四つづつ左右の弁官に統轄されていたとする説に対し、大弁官は左右の弁官に分れておらず、八官または六官のすべてを統轄していたとする説（前説では弁官の形態・機能は大宝令制に近似し、後説では大宝令制との差が大きい）がある。あるいは納言の職は天武朝に大・中・少に分れておらず、淨御原令制で分化することは、多くの研究者が認めているが、大・中の納言については、直接政治にかかわる執政官・輔政官であったか、天皇の秘書官的な侍奉官であったかは、なお意見の対立があり、納言や大・中の納言の合議制の存したことを主張する説もある。

それらに関しては、井上光貞・八木充・早川庄八・佐藤宗諱・森田悌・押部佳周・吉川真司・荊木美行・井上亘の諸氏をはじめとして多くの研究があり、それを整理して淨御原令と大宝令の差異を示すことは容易ではない。少なくともこの小稿のよくする所ではない。この問題はしばらく割愛し、近年出土の木簡によって明らかになりつつある官司名・官職名の差違について述べておくことにしたい。ただし詳しくは拙稿「大宝令前官制についての二、三の考察」（拙著『飛鳥奈良時代の考察』高科書店、一九九六年、初出一九七八年）に記したので、参照していただくことにし、ここには上記拙稿以後の知見を含めて簡略に述べる。

主として取上げるのは、官司の呼称である。ここで「官司の呼称」というのは、大宝令の場合、神祇・太政の二官のもとに、太政官の統

轄する中務省以下の八省があり、八省のもとに職・寮・司の部局が属し、べつに一台・五衛府がある、その官・省・職・司・台・府等の名称をさす。大宝令制では、部局の上下の統率関係や、規模の大小、職務の性格等によって「官司の呼称」に整然たる区別ないし体系があるが、淨御原令制ではそうした整った制度は成立していなかったと思われるのである。

さきに青木氏の研究を引いて述べたように、天武朝では大宝令の省の前身の官司呼称が官であった。天武朝にはすでに太政官があり（書紀、朱鳥元年九月条その他）、神祇官の前身とみられる神官（天武二年二月・同五年九月条等）があり、大弁官（天武七年一〇月条等）という官司もあった。神官は書紀・持統八年三月条に「神祇頭」とあるので、淨御原令では神祇官に改められたらしいが、続紀には大宝令施行以前の大宝元年二月条に「民官の戸籍を勘ふる史」とあるから、省の前身の「官」の称は淨御原令制でも変更されていない。

八省の前身だけではなく、淨御原令制前だが、持統元年正月条に「樂官奏樂す」とあり、続紀・文武三年正月条に「内藥官奏原加都」が見える。これはそれぞれ樂を奏する官司（雅樂寮）の官人、内藥司の官人を意味する語かも知れないが、大宝令制の雅樂寮のことを樂官、内藥司のことを内藥官と言った可能性がある。そうであるとなると、淨御原令では大宝令で寮や司を称とした官司呼称に「官」を用いたことになる。

このことに参考となるのは、続紀・大宝元年七月戊戌条の左の記事

である。

太政官¹処分、造²官官准職、造大安・薬師二寺官、准寮、造塔・丈六二官、准司焉。

ここにみえる官司は、造官官・造大安寺官・造薬師寺官・造塔官・造丈六官の五つである。いずれも浄御原令の令外の官であろう。官司としての規模に大小の差があるに違いないのに、官司呼称はひとしく官である。大宝令が成り、施行が近づいて来たので、大宝令の基準にあわせて、職・寮・司に准ずることを命じたのがこの処分であろう。これからすると、浄御原令制では、統属の上下や規模の大小に拘わらず、官司の呼称には「官」が用いられることが多かったと考えられる。

「官」の他に「職」の呼称も用いられた。朱鳥元年九月条の「膳職」、統紀・文武三年正月条の「京職」、同大宝元年二月条の「下物職」の記載や、統紀・天平一四年十一月発卯条の大野朝臣東人の薨去記事に「飛鳥朝廷³職大夫直広肆果安之子也」とあることで、推定できる。天智一〇年正月条に「学職頭」という官職名が見えることも参照されよう。天武六年一〇月条に「撰津職大夫」がみえるが、この官職名は大宝令のそれと一致し、書紀編者の潤色の疑いがある。

このように見て来ると、浄御原令には、官司の呼称として「官」の他に「職」があったことは認めてよいが、省はもろろん寮や司の呼称があったかどうかは疑わしくなる。むろん民部省は朱鳥元年七月条に、陰陽寮は天武四年正月条に、大学寮は持統三年正月条に見えるなどの

例はあるが、書紀編者の潤色による可能性があつて、そのままには信じかねる。ただ寮・司などの下級官司は書紀に現われることが少ないので、書紀だけで結論を出すことも憚られた。

しかしその不安の大半は一九六一年からはじまる藤原官跡の発掘調査による木簡の出土によつて一掃された。木簡にみえる官司には左のように「官」を呼称するものが少なくないのである（括弧の中の数字は奈良国立文化財研究所「藤原官木簡」の番号）。

陶官（五二二） 舍人官（五二四） 加之伎手官（飛鳥・藤

原宮発掘調査出土木簡概報八） 蘭官（奈良県史跡名勝天然記

念物調査報告二五冊、藤原宮）

右のほかに「御史官」（七九六）・「宮守官」（四六六）などの記された木簡も出土している。「官」だけでなく、「蘭職」（二）・「塞職」（二二）と記された木簡もある。文献によつて考えたところが、木簡によつて傍証されたといつてよい。

ただし藤原宮木簡には「薬司」（七二）・「蘭司」（飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報一二）の記載がみえる。薬司は大宝令制の後宮一二司のうちの「薬司」、蘭司は大宝令制の「園池司」を略して書いたのかも知れないが、あるいは浄御原令にも若干は官司呼称に「司」があつたかも知れない。統紀・大宝二年二月乙丑条の分注に、「先是、别有税司主鑑」とあることも想起される。しかしそれにしても、浄御原令の官司には、司の呼称を持つものは少なく、多くの官と若干の職によつて大部分の官司は占められていたであらう。

官司の呼称の種類の少ないことと関連するのは、長官・次官・判

官・主典の四等官を表わす名称も、浄御原令は大宝令ほど多種多様ではなかったらしいことである。国を支配する官司の長官が「宰頭」と称されたことは先に記したが、「宰頭」のみえる住吉大社神代記の記事は天智四年に当る乙丑年のこととするから、浄御原令の事例ではない。また田中卓氏が指摘した常陸守に相当する「常道頭」も、出典の統紀・宝亀八年八月条の記事に「飛鳥朝常道頭」とあるから、天武朝の例である。しかし書紀・持統八年三月条に「国司頭」の語がみえる。浄御原令でも国の長官を「頭」と称したとみてよからう。原史料には「国頭」または「宰頭」とあったのを、編者が「国司頭」と書き直したのであらう。

その他の官司でも、「神祇官頭」（持統八年三月条）・「学識頭」（天智一〇年正月条）がみえる。おそらく長官は各官司を通じて「頭」と表記されたのであらう。

次官と判官に当たる第二・第三の職名は例が少なくて確かなことは分らないが、さきに三節で「宰頭」所出の史料として挙げた住吉大社神代記に、「助道守臣壹夫」とあるので、第二等官（次官）は「助」かと思われる。第三等官（判官）は、統紀・大宝三年一〇月条の太上天皇（持統）の御葬司の官人の任命記事に、長官（穂積親王）・副（広瀬王・石川宮麻呂・猪名大村）・政人四人・史二人が見えることや、藤原宮本簡に「多治麻内親王宮政人正八位下陽胡甥」（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告二五冊藤原宮）とあることなどから、「政

人」かと思われる。

第四等官（主典）は、天武一四年九月条に、都努朝臣牛飼を「東海使者」とし、「判官一人、史一人」をそれに添えるという記事、天武七年一〇月条の詔に、「内外文武官、毎年史以上」の考送のために、正月上旬以前、「具記送法官」とあること、前引の太上天皇の御葬司の官人の任命記事では、第四等官として「史」がみえること、紀・大宝元年二月条に「勘民官戸籍史」とあること、などから、「史」であったことは確かであらう。

そうして第一等官は、時に兵政官長（天武四年二月条）というように、「長」が表すこともあったろうが、一般には官司の上下や官司呼称の違いに拘わらず「頭」記し、以下同様に「助・政人・史」であったのではないかと考える。

むすび

以上で飛鳥浄御原令と大宝令の差違を考察した稿を閉じる。自分の論考をも含めて既往の研究——それも全体ではなく一部——を纏めたものに過ぎず、得られた成果は貧しいのであるが、両令の間に具体的な差のあること（それを大きいと見るか、小さいと見るかは研究者の関心ないし立場で違ってくる）、とくに官司の呼称、四等官の名称にはかなりの差があることを論述したつもりである。

重要な論文で見落としたものが多いであらうし、また承知しながら

紙面の関係で割愛したのも少なくない。論旨を読み違えて紹介したものもあるかもしれない。それらについて寛恕を願うほかはない。教正を受けることができれば幸いである。

注

- (1) たとえば『国史大辞典』第四卷(吉川弘文館、一九八四年)「浄御原律令」の項で、「浄御原律の完成と施行については、肯定説もあるが疑問とする節が有力」(押部佳周氏筆)、『新編日本史辞典』(東京創元社、一九九〇年)は「飛鳥浄御原律令」の項で、「律についてはその存在を認めるのが古くからの通説であるが、(中略)大宝律令制定以前は唐律をそのまま適用していたとする見解が近年有力である」(鎌田元二氏筆)とする。
- (2) これらの戸籍は『大日本古文書』(時代別)に収められている。『寧楽遺文』には豊後国戸籍を欠く。
- (3) 明石一紀「班田基準についての一考察——六歳受田説批判」(竹内理三編『古代天皇制と社会構造』校倉書房、一九八〇年)、同「田令口分条の『不給』規定——六歳受田制説再批判——」(『日本歴史』四一五、一九八二年)、同「班田制」(『古代史研究の最前線』1 政治経済編上、雄山閣出版、一九八六年)
- (4) この論文はのち「律令国郡政治の成立過程」と改題して藺田香融著『日本古代財政史の研究』(塙書房、一九八一年)に収められ

た。

- (5) 播磨国風土記の場合、饒磨郡小川里の条に「庚寅の年(持統四年)、上野大夫、宰たりし時」、讃岐郡中川里の条に「近江天皇の世、道守臣此の国の宰と爲り」とあり、年時不明ながら饒磨郡貽和里の条に「生石大夫、国司爲りしの時」とことなる表記をしている。

- (6) 井上光貞「律令体制の成立」(『井上光貞著作集』第一卷(日本古代国家の研究) 岩波書店、一九八五年)、八木充「太政官制の成立」(八木「律令国家成立過程の研究」 塙書房、一九六八年)、早川庄八「律令太政官制の成立」(早川「日本古代官僚制の研究」 岩波書店、一九八六年)、佐藤宗諄「律令太政官制と天皇」(『大系日本国家史』第一卷、東大出版会、一九七五年)、森田悌「太政官制成立の考察」(森田「日本古代律令法史の研究」 文献出版、一九八六年)、押部佳周「天武・持統朝の官制」(押部「日本律令成立の研究」 塙書房、一九八一年)、荊木美行「浄御原令官制から大宝令官制へ」(荊木「律令官制研究史の研究」 国書刊行会、一九九五年)、吉川真司「律令太政官制と合議制」(吉川「律令官僚制の研究」 塙書房、一九九八年)、井上亘「日本古代朝政の研究」(吉川弘文館、一九九八年)、その他。
- (7) この論文については荊木美行氏の批判的研究がある。荊木「飛鳥浄御原令官制の一考察——官司の呼称とその序列を中心に——」(注(6)の著書)。

(8)ここに述べた官司の呼称や四等官名に対する批判的見解もある。

春名宏昭『律令国家官制の研究』(吉川弘文館、一九九七年)は、書紀・天武四年正月条に見える「外薬寮」を挙げて「寮」字も用いられているとする(四九ページ)が、同条の「陰陽寮」「大学寮」、持統七年正月条の「内蔵寮」などとともに書紀編者の潤色であろう。また同書には丁丑(天武六年)の年紀をもつ小野毛人墓誌に「刑部大卿」の語が見えることを挙げ、「刑部大卿」は刑官の長官と見做して間違いなからう。(中略)刑部大卿は一次史料中の用字であり、否定する理由はない(五〇ページ)とするが、この墓誌が丁丑年につくられたかどうかについては、藪田嘉一郎『日本上代金石叢考』(河原書店、一九四九年)が疑いを掛け、墓を改葬または改修した際の製作とする説が有力である(『書』の日本史』第一巻、平凡社、一九七五年。奈良国立文化財研究所『日本古代の墓誌』飛鳥資料館、一九七七年、等。該当部分の筆者は、前者は石上英一氏、後者は東野治之氏)。一次史料とこの疑問である。

また一九七七年度の調査により、徳島市国府町の観音寺遺跡から、「板野国守大夫分米三升(下略)」と書かれた木簡が、「己丑年□月廿九日」の紀年のある木簡と、ほぼ同一の地層から出土し、己丑年が持統三年に相当することから、持統朝に「国守」という職名のあったことが新聞等に報道され、一九九八年一二月の木簡学会年度大会でも調査担当者(和田萃氏)から同趣旨の報告があ

った。しかし紀年木簡の投棄されたのが己丑の直後なのか、同一地層であっても十数年の年代差を認めることができないのか、国守木簡のはじめ四字は「板野国守」という人名を表すのではないのか、などの疑問があつて、浄御原令に「国守」という官職名があつたという意見は保留しておきたい。